要はないのである。ところが、サルを研究するには、すべての個体に名前を与えて研究する。個体差があるからである。とくに文化社会の人間は、生まれたのちに社会からちがった要素を取り入れること、その取り入れ方や社会的立場の条件などによって、一人一人が異なったものに形成されてゆく。名前のついてない人間は一人もいないが、名前がついていることは、特徴を持ち、個性を持っているからである。人間は誰もが、他に同じものの存在しない、かけがえのないものである。人間の生命は地球よりも重いといわれる。それは、地球は一つであるように、われわれ人間も名前をもち、それぞれ特徴を持った唯一無二のかけがえのないものということである。文化社会は、個人を空虚にしていると同時に、それに充実した中味を与えて、かけがえのないものに作り上げるのである。

動物は遺伝的に変わったものにならないと進化することが出来ない。ところが、人間はかたちを変えないで、ちがったものになっていく能力を持っている。これを偽種化現象という。

動物は遺伝的に決められたものであるが、それは環境との対応で決められている。したがって、環境が変われば、それに適応するためには遺伝的に変わっていかねばならない。これは時間を要する過程である。これとちがって、人間は、自分も環境を変えるが、環境が変われば、それに対応して生活の様式を変えていくことが出来る。つまり、人間はかたちを変えないで、生活の内容をかえないでも、環境変化に適応しうるのである。

古生物の歴史をみると、多くの動物が発生して滅んでいった。人間も彼らと同様、いづれは種族の寿命が尽きるだろう、人類にも寿命があるはずといわれている。しかし、動物はかたちを変え、種類をかえることによって、生命を持続するので、元の種類はなくなっていく。そして、変わることの出来なかったものは滅んでいく。しかし、人間は、かたちを変えないでも、いくらでも変化に対応できるから、恐らく人間は、自然がつくった最終的な動物であり、容易なことでは滅ばないと思われる。したがって、優位の立場にある人間は、地球上のすべての動物や生態系に対して責任を持つべき最終的動物というべきである。人間をよくするには、優生学的手法も必要であろうが、それにもまして、社会をよくし、文化をよくすることによって、偽種化をすすめ、生活を高めていかねばならない。そして、人間であるため、人間であり続けるには、生涯学習しなければ変化する環境に適応し得ない。これが、本能社会とは異なる文化社会に生きるわれわれの生き方ではあるまいか。

図書館学の異端視された一学説

大谷大学 教授 荷葉堅正

この頃、雑誌「理想」の中で、「一冊の本」という見出しで、筆者が読んだ本のなかから、これをと思う一冊を選んで、その本の紹介や批評が書かれている。

本年（一九七八年）一月号に、沢田允茂教授は、その見出しの下で、「私が書きたいのは、一冊の本の「一冊」を特定の本で代入して、この本について書くのではなくて、何でもいい何かある一冊の本が、それについて書くにふさわしい価値を私達の生活の中で持つに至ったか、ということであり、これを別の表現でいうならば、一体、本とは何か、本を読むということはどういう意味を持つのか、ということを改めて考えて見ようということである。」と書き初められる一篇を見て、美しい文で、確実な論旨で紹介される「一冊の本」を期待した私には、いささか物足りないものを一方に感じると同時に、一方では多くの期待を持って、新しい識見を感じさせたことである。この新しい識見が、図書館学と、その根底において交錯していると思われてならない。

図書館の全ての現象を、その対象とする図書館学にあって、その実際的側面を優先すべきか、または理論的側面を優先すべきか、という問題は、すでに今世紀の始め頃から提起され、論争がくり返えされて来たことである。

しかもその答えは国によって、また時代によって異なっている。一般にこのことを最も問題にするといわれるのはアメリカ合衆国であるといわれ、その国では、振子の運動のように一方が他方に入れ違いに選ばれていると観察されるといわれている。

しかし強弱の差はあるにしても、また時期は相違しても、その他の国々に於て、同じく観察されるのではないだろうか。

アメリカの図書館学は一般に四つの時代に区別せられて考察されている。

(1) デュイ（Melwil Dewey）以前の時代
(2) デュイ時代
(3) ウイリアムソン（C. C. Williamson）時代
(4) ウイリィアムソン以後の時代

第一のデュイ以前の時代は、図書館の中で、守られて来た諸業務を図書館員が、ただ経験的に習得して、それを次の時代に伝えて行くという時代であり、第二の時代は一八八七年に、School of Library economy を、デュイがコロンビア大学の一部として創設した時に始まり、これから一九二三年にウイリィアムソンが Training for Library Service という報告を提出するまでがデュイ時代といわれるものである。

この時期がデュイの影響下にあって、図書館界にあっては、次第にその影響が、各館に普及して行った。

このとき一九二三年ウイリィアムソンの報告が世に問われ、従来のデュイの仕方を〃極単な技術〃として、図書館学とその教育とを、それから開放しようとした機運が起こり、所謂シカゴ学派の台頭となって来た。しかし丁度その頃一方アメリカの全公共図書館に於ては、ようやくデュイの仕方が定着して行ったのである。

だから、そうした状態にあった公共図書館の図書館員たちが、シカゴ学派の意図するところを自分たちの仕事に相反するものでないということを知ることは容易でなかった。

むしろ相反するもののように思われたに相違ない。——全てではないにしても——

しかしそうした科学的研究、社会科学的研究に期待するところもあり、そうした研究が次第に多く発表されて行ったことである。

今、ここで一学説として取り上げようとするバトラー（Pierce Butler）の図書館学序説も、こうしたシカゴ学派に属する研究であり、シカゴ大学図書館学大学院の学長ウイルソン博士（Louis R. Wilson）が、この書に序文を書いて、この書の意図するところが、シカゴ大学の図書館学大学院を代表する意見であると述べられたことである。

この学者の、この書をとり上げるにしても、今回は特に左記の比較的新しい研究書を参照することに重点を置くことにしたい。

A. K. Mukherjee, Librarianship, 1966.
J. H. Shera, Sociological Foundation of Librarianship, 1970.
〃 The Foundation of Education for Librarianship, 1972.
〃 Introduction to Library Science, Basic Element of Library Service, 1976.
J. E. Sabor, Methods of Teaching Librarianship, 1969.

この書は従来難解であるといわれ、前述のウイルソン博士の序には、シカゴ大学図書館学大学院を代表する意見といわれているが、同じ頃この書を批評した論文、コロンビア大学のリース（Reece, E. J.）が雑誌 Library Journal 一九三三年に、またミネソタ大学のウオルター（Walter, F. J.）が雑誌 Library Quarterly 一九三三年に記載した書評によれば、必ずしも全面的に賛成とは受け取られない。「詳しさに欠けている。」とか「現場の図書館員達には理解するのに手間がかかる。」とかいわれ、期待しながらなお賛成しかねる様子がそれらの文体からうかがえる。当時の学者であっても、その様であるから、それ以後、一時期に於ても、特に日本の学者にあっては、そうである。

「かれの小著に現われたこの論説は、一方、非常に反対があり、非難をする者もあった。これがためシカゴ大学内でも、教授間で若干の不和の原因を作り、多くの反対者を納得させることができなかった。実践活動の要求からくる、技術の教育に関係する人は、路傍の人のように、無関係になるであろうという不平からであった。……たとえそれが科学として、多くの人を納得させ得ないとしても、かれのこの試論は、図書館界に一時期を画するものとして、高く評価し、その業績は不朽に伝えるべきものである。しかし真の意味では、図書館学すなわち図書館の科学的研究とは言い得ない……」と、椎名六郎氏は彼の新図書館学概論（一一五頁）に述べて、図書館学に対する立場の相違を示すと同時に、バトラーの学説に対する一般の不評を示されている。また、かなり前になるが、バトラの講義を一九五一年から一九五二年に渉る一年間直接聴講されて、バトラの構想を発表せられた永田正男氏は、バトラーに最も傾倒した一人であると思われるが、それでもバトラーの展開する理論は、彼の樹立した体系であって、アメリカにおける図書館学一般の行き方というわけでもないし、この方法以外に理論的基礎づけが出来ないということでもないと、先づ始に断

って論旨が述べられている。上述のことから見ても、バトラーの理論が必ずしも一般図書館界に全面的に歓迎されたものでなかったことが知られる。そのことを指して演題に「異端視された」という言葉を付加したことである。

しかしながら、上にかかげたシェラ教授の三つの著書、ムケルジーの著書、サバー教授の図書学教授法等近年発表された労作に見られるバトラーの理論解釈には、はるかにその重要性を認めているように思われる。

時間の制限もあり、多くの説明は別の機会にゆずるとしても、サバーは、「いまは古典になっている〃図書館学序説〃は、今日も厳密な意味で図書館学への最も明快なアプローチである。バトラーはシカゴ大学図書館学大学院の教授法についての改革と向上をはかる最も重要な実験のひとつにとりくんでいるときであったことを、この著作は思い出させる興味のあるものである。これは改革した教授法と堅実な理論は、自然な共働者であり、図書館教育の発展史を作ることを荷なわされていることを示唆している」と述べている。

シェラも同じく、ピアス・バトラーの諸論文、及びこの図書館学序論を引用して、〃より科学的〃であろうとした点の正しさと同時に、その科学さえも、あまりにも科学的、あまりにも自然科学的として責めながら、それを離れたこと（このことが一般にはとかく批判された）の正しいことを指示していて、私の理解を助けたことである。

ピアス・バトラー（一八八六―一九五三）は古典を学び、中世ドイツ語を専攻して大学を卒業し、論文「イラネウスのキリスト論」で博士号を与えられた。

彼は、一九一六年、ニューベリー図書館の受入係のアシスタントとして入り、受け入れ主任になり、図書館の蔵書の不備を書誌により徹底して調査し、一九一九年からこの図書館のため写本、インキュナブラ、初期刊本の目録を作成した。同年、印刷史のコレクション、ション・M・ウィング財団が設立されると、バトラーは、勤務のかたわらこの財団を助け、その蔵書の充実を助け、一九二二年には、図書館と財団のため、ヨーロッパに渡り、それらの資料の充実を助けた。

一九二七年、シカゴ大学の講師となり、印刷史を講じ、一九三一年に専任教授になった。

それ以後、シカゴ大学図書館学校が発行する季刊雑誌 Library Quarterly と図書館関係学術単行書シリーズに参加し、後者には、「図書館学序説」（一九三三）、「ヨーロッパにおける印刷の起原」（一九四〇）があり、前者には図書館学の全領域に渉り、多数発表せられたが特に重要なものとして「研究者の文献アプローチ・人文科学」（一九四〇）「図書館のレファレンス機能」（一九四三）、「レファレンス分野の概観」（一九四三）、職業としての図書館職員」（一九五一）、「図書館の文化的機能」（一九五二）、最後に「図書の生涯」が発表されている。

バトラーの学説を知るためには、彼の歩んだ途と共に、これらの諸労作を考察しなければならないが、一般には最初の労作が先

ずとりあげられる。

それはたしかに、その序に、「社会活動の他の分野にいる人達と異なり、図書館員は自分の職業の理論面に不思議なほど関心を示さない、……図書館員は明らかに自分の素朴な実用主義のなかで独り立ちしている。つまり直接の技術過程を合理化する、そのことだけで知的関心を満足させているように見える。……」というように、図書館と図書館員の意識が現状のままでよいのだろうかという疑問から出発して、科学的な分析の必要と客観的実証性の必要を考え、その際の問題点を指摘していったことは問違いない。

そのために第一章「科学の性質」が論ぜられ、数学における確律論が出され、その応用例として出されるものに理解しにくいものがあるが、近代における科学の追求とその限界が吟味され

第二章「社会学的問題」は社会における図書館の役割を中心とし、

第三章「心理学的問題」は読書に対する科学的な分析とその際の問題点を考察し、

第四章「歴史の問題」は古い時代の情報と新しい時代の情報と異なる点が考察され、二次的情報＝書誌が、バトラーにとりて最も重要なものとされている。

第五章「実際面の問題」は図書館学が理論づけられた場合、現実の図書館がどのような利益を受けるかという考察がなされ、そこにある筈の図書館員が、またあるべき図書館の経営が指示されている。

一例を上げると、第五章(1)の始めに、「職業哲学があるならば、図書館の職は、目的を完全に意識することからのみ生ずる行為の方向づけを与えられるであろう。この公共機関が必要かつ正当な社会的要素と見なされるか、或は幸運な個人に功徳をほどこす慈善行為と見なされるかは、地域社会の福祉向上にとって大きな違いとなろう。」という。そのことはデユイの時代に早くから設定され、述べられ、公共図書館が、それ以前の社団図書館から区別するものとしていわれたことであり、民衆が権利として公共図書館を利用する重要な意識に結びつくものであり、バトラーの理論がそれら図書館の実状に相違することではないといわなければならない。むしろあるべき本来の相を意図したのであろう。

図書館学の領域にあって、理論と実際の問題は、その何れを先にするかが重要な問題として、已に今世紀の初めよりアメリカにおいて提起されてきたことである。この論稿もその線上にあるといえよう。